

かぶと虫

新美南吉

青空文庫

お花畑から、大きな虫が一ぴき、ぶうんと空にのぼりはじめました。

からだが重いのか、ゆつくりのぼりはじめました。

地面からメートルぐらいのぼると、横に飛びはじめました。

やはり、からだが重いので、ゆつくりいきます。うまやの角かどの

方へ、のろのろといきます。

見ていた小さい太郎は、縁えんがわ側からとびおりました。そして、

はだしのまま、ふるいを持って追っかけていきました。

うまやの角をすぎて、お花畑から、麦畑へあがる草の土手^{どて}の上で、虫をふせました。

とつてみると、かぶと虫でした。

「ああ、かぶと虫だ。かぶと虫とつた。」

と、小さい太郎はいいました。けれど、だれも、なんともこたえませんでした。小さい太郎は、兄^{きょうだい}弟^{だい}がなくてひとりぼっちだったからです。ひとりぼっちということは、こんなとき、たいへんつまらないと思います。

小さい太郎は、縁側にもどつてきました。そしておばあさんに、「おばあさん、かぶと虫とつた。」と、見せました。

縁側えんがわにすわって、いねむりしていたおばあさんは、目をあいてかぶと虫を見ると、

「なんだ、がにかや。」

と、いって、また目をとじてしまいました。

「ちがう、かぶと虫だ。」

と、小さい太郎は、口をとがらしていましたが、おばあさんには、かぶと虫だろうががにだろうが、かまわないらしく、ふんふん、むにやむにやといつて、ふたたび目をひらこうとしませんでした。

小さい太郎は、おばあさんのひざから糸切れをとって、かぶと虫のうしろの足をしばりました。そして、縁板えんいたの上を歩かせま

した。

かぶと虫は、牛のようによちよちと歩きました。小さい太郎が糸のはしをおさえると、前へ進めなくて、カリカリと縁板をかきました。

しばらくそんなことをしていましたが、小さい太郎はつまらなくなってきました。きつと、かぶと虫には、おもしろい遊び方があるのです。だれか、きつとそれを知っているのです。

二

そこで、小さい太郎は、大頭に麦わらぼうしをかむり、かぶと

虫を糸のはしにぶらさげて、門口かどぐちを出ていきました。

昼は、たいそうしずかで、どこかでむしろをはたく音がしているだけでした。

小さい太郎は、いちばんはじめに、いちばん近くの、くわ畑の中の金平きんぺいちゃんの家へいきました。金平ちゃんの家には、しちめんちようを二わかつていて、どうかすると、庭に出してあることがありました。小さい太郎はそれがこわいので、庭まではいつていかないで、いけがきのこちらから中をのぞきながら、

「金平ちゃん、金平ちゃん。」

と、小さい声でよびました。金平ちゃんにだけ聞こえればよかったですからです。しちめんちようにまで、聞こえなくてもよかったです。

からです。

なかなか金平ちゃんに聞こえないので、小さい太郎は、なんどもくりかえしてよばねばなりませんでした。

そのうちに、とうとう、うちの中から、

「金平はのオ。」

と、返事がしてきました。金平ちゃんのおとうさんのねむそうな声でした。

「金平は、よんべから腹はらがいつうてのオ、ねておるのだで、きょうはいっしよに遊べんぜエ。」

「ふうん。」

と、聞こえないくらいかすかに鼻の中でいって、小さい太郎は

いけがきをはなれました。

ちよつとがっかりしました。

でも、またあしたになって、金平ちゃんのおながおれば、
いつしよに遊べるからいいと思いました。

三

こんどは、小さい太郎は、ひとつ年上の恭きょういち一君くんの家に行く
ことにしました。

恭一君の家は、小さい百ひやく姓しょう家やでしたが、まわりに、松や、
つばきや、かきや、とちなど、いろんな木がいっぱいありました。

恭一君は木のぼりがじょうずで、よくその木にのぼっていて、うかうかと、知らずに下を通つたりすると、つばきの実を頭の上に落としてよこして、おどろかすことがありました。

また、木にのぼっていかないときでも、恭一君はよく、もののかげや、うしろから、わつと行ってびっくりさせるのでした。ですから小さい太郎は、恭一君の家の近くにくると、もうゆだんができないので。上下左右、うしろにまで気をつけながら、そろりそろりと進んでいきます。

ところがきようは、どの木にも恭一君はのぼっていません。どこからも、わつと行ってあらわれてきません。

「恭一はな。」

と、にわとりえさに餌をやりに出てきたおばさんが、きかしてくれました。

「ちよつとわけがあつてな、三河みかわの親類へきのう、あずけたただがな。」

「ふうん。」

と、小さい太郎は、聞こえるか聞こえないくらいに、鼻の中心でいいました。なんとということでしょう。なかのよかつた恭一君が、海のむこうの三河みかわのある村に、もらわれてしまったということです。

「それで、もう、もどつてきやしん？」

と、せきこんで小さい太郎はききました。

「そや、また、いつかくるだらあずに。」

「いつ？」

「ぼんや正月にや、くるだらあずにな。」

「ほんとだねおばさん、ぼんと正月にやもどつてくるね。」

小さい太郎は、望みをうしないませんでした。ぼんにはまた、
恭きょういち一君と遊べるのです。正月にも。

四

かぶと虫を持った小さい太郎は、こんどは細い坂道をのぼって、
大きい通りの方へ出ていきました。

車大工さんの家は、大きい通りにそつてありました。その家

の安雄^{やすお}さんは、もう青年学校にいつているような大きい人です。けれど、いつも、小さい太郎たちのよい友だちでした。じんとりをするときでも、かくれんぼをするときでも、いつしよに遊ぶのです。安雄さんは小さい友だちから、とくべつに尊^{そんけい}敬^{けい}されています。それは、どんな木の葉、草の葉でも、安雄さんの手でくるくとまかれ、安雄さんのくちびるにあてると、パイと鳴るところができたからです。また安雄さんは、どんなつまらないものでも、ちよつと細工をして、おもしろいおもちゃにすることができたからです。

車大工さんの家に近づくにつれて、小さい太郎の胸^{むね}は、わくわくしてきました。安雄さんがかぶと虫でどんなおもしろいことを

考え出してくれるかと、思ったからです。

ちようど、小さい太郎のあごのところまであるこうしに、首だけのせて、仕事場の中をのぞくと、安雄さんはおりました。おじさんとふたりで、仕事場のすみのといしで、かんなの刃を^はといていました。よく見るときようは、ちゃんと仕事着をきて、黒い前だれをかけています。

「そういうふうに入力を入れるんじゃないやねえといったら、わからんやつだな。」

と、おじさんがぶつくさいいました。安雄さんは、刃のとき方をおじさんにおそわっているらしいのです。顔をまっかにして一生けんめいにやっています。それで、小さい太郎の方を、いつま

で待っても見てくれません。

とうとう、小さい太郎はしびれをきらして、

「安さん、安さん。」

と、小さい声でよびました。安雄さんにだけ聞こえればよかったのです。

しかし、こんなせまいところでは、そういうわけにはいきません。おじさんが聞きとがめました。おじさんは、いつもは子どもにむだぐちなんかきいてくれるいい人ですが、きょうは、なにかほかのことではらをたてていたとみえて、太いまゆねをびくびくと動かしながら、

「うちの安雄はな、もう、きょうから、一人まえのおとなになっ

たでな、子どもとは遊ばんでな、子どもは子どもと遊ぶがええぞや。」

と、つつばなすようにいいました。

すると安雄さんが、小さい太郎の方を見て、しかたがないように、かすかにわらいました。そしてまたすぐ、じぶんの手先に熱心な目をむけました。

虫がえだから落ちるように、力なく、小さい太郎はこうしからはなれました。

そして、ぶらぶらと歩いていきました。

小さい太郎の胸むねに、深い悲しみがわきあがりました。

安雄さんはもう、小さい太郎のそばに帰ってはこないのです。もういつしよに遊ぶことはないのです。おなかがいたいなら、あしたになればなおるでしょう。三河みかわにもらわれていったって、いつかまた帰ってくることもあるでしょう。しかし、おとなの世界にはいった人が、もう子どもの世界に帰ってくることはないのです。

安雄さんは、遠くにいきはしません。同じ村の、じき近くにいます。しかし、きょうから、安雄さんと小さい太郎は、べつの世界にいるのです。いつしよに遊ぶことはないのです。

小さい太郎の胸には、悲しみが空のようにひろく、深く、うつろにひろがりました。

ある悲しみは、なくことができます。ないて消すことができます。す。

しかし、ある悲しみはなくできません。ないたって、どうしたって、消すことはできないのです。いま、小さい太郎の胸むねにひろがった悲しみは、なくことのできない悲しみでした。

そこで小さい太郎は、西の山の上にひとつきり、ぽかんとある、ふちの赤い雲を、まぶしいものを見るように、まゆをすこししかめながら、長いあいだ見ているだけでした。かぶと虫がいつか指からすりぬけて、にげてしまったのにも気づかないで――。

青空文庫情報

底本：「童話集 こんぎつね―最後の胡弓ひき ほか十四編」講
談社文庫、講談社

1972（昭和47）年2月15日第1刷発行

1988（昭和63）年1月30日第30刷発行

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年6月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

かぶと虫

新美南吉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>